

〔解説〕 博学連携と市民との関わりへの着目

美濃加茂市民ミュージアムは、しばしば、博物館関係の図書や雑誌、博物館関係者のための研修で紹介されてきた博物館である。とりわけ、「地域との関わり」や「博物館教育」というテーマにおいて、知られていると言ってよいであろう。美濃加茂市民ミュージアムの活動は、可児氏の説明にあった4つの理念と分かちがたく結びついているように捉えられるが、特に、可児氏が取り上げたように、博学連携と市民との関わりは、特徴的といえよう。

博物館と学校の連携は、「博学連携」として、盛んに取り組まれているように見られるが、いくつかの課題も指摘されてきている。博学連携は、博物館が学校教育にどう役立つかばかりが問われるきらいがある。すなわち、連携というよりも一方的な貢献であり、学校教育の文脈で、学習評価や利用が考えられ、博物館における学習の独自性が尊重されていないことや、学校教育に役立つことばかりに存在意義を見出すことは本末転倒であることが、しばしば言われている。

可児氏の講義からは、美濃加茂市民ミュージアムがこれらの課題を意識していることが読み取れる。それは、博学連携について、「学校での授業を補うだけではない」、「学校ではない博物館ならではのものを体験してほしい」、博学連携での学習は「私たち博物館から見たら、最終目標ではなく、通過点である」という発言から、明らかであろう。講義で言及されたアンケートのように、学校教育の評価とは異なる形で、児童生徒の学習を読み取ろうとしていることも、その意識の表れと理解できる。

一方、博学連携が学校教育のカリキュラムに位置づいていることも特徴的であると言える。博物館には、授業の単元に合わせたワークシートなどの教材を公開しているところがある。し

かし、美濃加茂市民ミュージアムでは、長期的で複数回にわたる利用が想定され、教員等を交えた内容の検討が、活動の前提となっている。当然、その背景には、学校の教職員が博物館に対して理解があるような環境が作りだされていることも特筆すべきであろう。

可児氏が強調したもう一点が、市民との関わりである。可児氏の説明では、設立準備に17年をかけたとされ、「市民の皆さんと話し合う時間もできた」という。美濃加茂市民ミュージアムの名称が「美濃加茂市立博物館」ではないことから、開館前から市民参画が意識されていたと考えられよう。

特に重視されていると考えられるのが、ボランティアとの活動であるが、可児氏が、ボランティアの「組織化をしない」という考え方を述べているのは、興味深い。美濃加茂市民ミュージアムの職員はボランティアとどのように関わっているのか、ボランティアをどのように捉えているのか、という点も、美濃加茂市民ミュージアムを理解するためには不可欠であると考ええる。

なお、時間の関係で、講義では説明されていない取り組みも多い。たとえば、「ミュージアム・ステーション」として、地域に関する情報を収集・整理して、ウェブサイトで公開しているなど、地域の情報拠点というべき活動をしていることは、一見の価値があろう。

地域実習では、博学連携や市民との関わるの場に積極的に参画することが期待されるが、可児氏の説明では、それらの機会が得られるよう、ご配慮いただけるようである。美濃加茂市民ミュージアムでの実習は、博物館と「コミュニティ」の関係を考える貴重な機会となるに違いない。

(仲村拓真)